核兵器なくそう 女性のつどい 2025inヒロシマ

被爆者の思いつなぎ核兵器のない世界へ

〈1面から〉

8月5日、広島で「核兵器なくそう女性のつどい2025inヒロシマ」が開かれました。

戦後・被爆80年の節目となるつどいは、海外代表34人を含む550人が参加し、活気あふれる雰囲気のなか、幕を開けました。

新婦人の米山淳子会長は開会あいさつで、日本被団協のノーベル平和賞受賞を喜び、草の根の女性運動が核兵器禁止条約を実現させた力を確認。「核の威嚇や軍拡、排外主義に直面する中、改めて女性の連帯を強めよう」と呼びかけました。

被爆者の河野キヨ美さんが被爆の実相を語ると、その迫力に会場は水を打ったように静まり、話し終わると参加者が立ち上がり、大きな拍手が巻き起こりました（右下）。

海外代表2人の発言（下）に続いて、各国の女性たちから次つぎと一言ずつ連帯スピーチ。高校生や各団体による運動交流では、新婦人沖縄の東江真澄（ひがしえまさみ）さんが発言（写真右）。軍事要塞化が進む沖縄の厳しい状況のなかで「先輩たちに励まされながら、沖縄・広島・長崎をつなぎ、平和を守る行動を続けたい」と力を込めました。

フィナーレは「戦争反対、核兵器反対」を5カ国語でコールし、核兵器のない未来への希望を響かせました（写真左）。

▼オープニングは、アンクロン（竹のやさしい音色が響くインドネシアの楽器）の演奏

▲平和へのメッセージを書いて横断幕に張るコーナー。バザーやフォトスポットなど参加型で

被爆証言

核兵器廃絶、若い世代に希望託す

河野（こうの）キヨ美（みさ）ん

80年前、原爆投下の日、私は14歳で広島から3.5キロメートル離れた田舎に住んでいました。8月6日、突然の爆発音と揺れ。南の空にはきのこ雲が立ち上がっていました。

翌朝、姉を探すために母と広島へ向かい、駅に降り立つと、動物が焼け、腐ったような悪臭で息が詰まりそうでした。

髪が焼け縮れ、皮膚が肩から垂れ下がった人びとがうつろな表情で列をなし、裸同然の姿で歩いています。熱線で膨れあがり炭化した死体、内臓が露出した死体、市内は死体であふれていました。一台の電車の側を通る時に何気なく窓をみると、黒いものがたくさんぶらさがっています。よく見たら、つり革を持った人間の腕だけが炭のようになって、ずらっと並んでいたのです。

姉が勤めていた病院へ行くと、医者や看護師も多くが亡くなっており、人手がありません。死傷者であふれていますが、生き残った看護師さんが走り回って運ばれてきた人を寝かせるだけで、薬もありません。

母が姉の名を呼ぶと「似島（にのしま）にいる」と聞き安堵しましたが、理由を聞く間もなく、血まみれの人が次つぎと運ばれてきます。

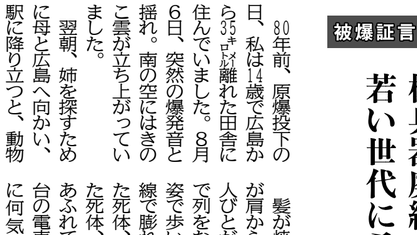
大混雑の病院から外に出ると、花壇だった場所に自分と同じ、中学生くらいの少年の死体が丸太のように積み重ねてありました。当時は約8200人の中学生が防火帯づくりに動員されており、そのうち630人が犠牲となりました。

一日中惨状を見続け、初めは涙が出ましたが、やがて心が麻痺し、感情もなくなっていきました。

原爆は一瞬で街も人も根こそぎ破壊します。私は生き延びましたが、多くの人が無念を抱えたままに亡くなりました。

今の核兵器は当時よりはるかに強力で、使えば地球が滅びます。日本人には世界にしっかりと核兵器の恐怖を伝える、人間としての義務があります。今日は若いみなさまが一生懸命、原爆のことを勉強してくださって、とても力強く思います。

私は94歳となりました。みなさんに希望を託して核兵器がなくなるその日まで、ともに歩んでほしいと願います。



河野さんの語りに大きな拍手が

アメリカ

5歳の記憶、世界へ平和の声を

ニューヨーク州ピースアクション学生組織担当

ニーノ・ブルジャナゼさん

2008年8月、母国ジョージアで戦争が勃発したとき、私は5歳でした。国中の、また家族の中に広がったパニックを今でも覚えています。戦争でジョージアの領土の20％以上がロシアの占領下に置かれ、何百人もの人びとが亡くなり、避難民となり、私の心に決して消えない記憶として刻まれました。

私は新しい世代の平和活動家や変革者を支援し、ニューヨーク州内にピースアクションの大学支部を15設立しました。2月には学生平和会議を成功させ、国連の核兵器禁止条約第3回締約国会議（TPNW）に参加。日本や韓国の平和活動家や学生リーダーの仲間に出会い、互いの活動から学べたことは、女性平和活動家にとっての未来像を描く上で大いに役立ちました。

女性・平和・安全保障に関する国連安全保障理事会決議1325の採択25周年にあたり、女性が平和の構築と維持に重要な役割を果たしていることをあらためて実感します。しかし、この分野においては女性のリーダーも、多様な声を真に包摂する代表も不足しています。

私は今ここで、困難に負けない強さとまわりの人に元気を与えてくれる女性たちに囲まれています。女性たちこそ平和で持続可能な未来を築くことができるのです。

子どもたちが戦争やテロの影のもとで育つことのない世界を築くために、手を取り合いましょう。私たちのやるべきことは、先輩たちのバトンを引き継ぎ、次の世代を励まし教育することです。ありがとう、マドロバ！

韓国

「光の革命」、韓国女性の123日

韓国女性団体連合常任代表

キムミン・ムンジョンさん

韓国女性団体連合は1987年創立、7つの支部、29の団体が加盟する連合です。毎年5月24日に、平和と軍縮のための世界女性の日を記念したフェミニスト連帯行動で、朝鮮半島の平和と非核化のための統一・外交・安保政策を促します。

12・3戒厳の夜、私は国会の前に行きました。軍の国会侵入などの状況をリアルタイムで伝え、市民社会関係者らと対応について議論し、ユン大統領の即時辞任などを求める「非常行動」を発足。123日間、広場を開き、1千万人の市民が行動しました。

若い女性たちは、女性家族省を廃止しようとしたユン政権が、差別と女性嫌悪を増幅させたことを実感しており、1005人の市民ボランティアは、女性が72・8％で、うち20、30代が78％を占めました。

彼女たちは「民主主義が破壊された真っ暗な世の中を私が持っている最も大切で明るい光で照らす」と、自分の好きな歌手のベンライト（光る応援棒）を手に集まりました。韓国ではこれを「光の革命」と呼んでいます。

女性連合は「非常行動」の共同議長団体として、「平等な集会の約束」を作り、「非常行動」の意思決定に女性とマイノリティーの40％以上の参加、対策本部への女性団体の積極的な参加の保障などにとりくみました。4月4日のユン大統領弾劾以後は、大統領選挙で「私の生活を変えるジェンダー平等の1票」キャンペーンをおこない、今は新政府が、ジェンダー平等政策のヴィジョンと体制を打ち出せるように、活動を繰り広げています。

参加者の感想

- 被爆者の河野さんが私たちに託してくださった思いをしっかり受け止めたい。1人では重くてもみんなとがんばりたいです。
- 同じ仲間、女性同士の連帯感を体感し、パワーをもらった。あきらめない、負けない、黙らない、くじけない…女性たちがその力を信じて活動し続けることで平和を守っていける。
- 海外の方がたの熱い意気込み、日本の被爆体験、実相を引き継ぐ思いがつめこまれ、明日からガンバローと思うものでした。
- 今私ができること、日常に帰っても考えて行動していきたい。みんなが変われば国も変わる。
- 80年を経ても今も生々しく刻まれている辛い記憶を、大勢の人前で話すという勇気、覚悟はいかばかりか。この感動をエネルギーに変えて行動していこうと思いました。
- 世界の女性たちとの交流は、明るく楽しい雰囲気で、こんなにも多くの国の人とつながれるんだという喜びに満ちていました。

女性平和基金 招待者と交流深めて

（8日、長崎）

8日、新婦人は長崎市で女性平和基金招待者のキムミン・ムンジョンさん、ニーノ・ブルジャナゼさんと交流。2人から、女性平和基金で初めて世界大会に参加できたことへの感謝が述べられました。

次世代会員が「韓国やアメリカで若い世代が権力に負けずにたたかっているのはどうして？」と質問。ムンジョンさんは「最前線でし烈にたたかっているのが若い女性たち。彼女たちのゆまぬ行動のもとには、運動の成功体験がある。声を上げ、行動し、政治も制度も転換させてきた。運動で希望を導きだしてきたことが大きい」と。

ニーノさんは「家父長制度に抗うこと。女性は中絶する権利さえ奪われた。〝私の権利〟〝コミュニティーの権利〟のために運動する女性たちこそ、意思決定の場に必要」と答えました。

逆行の中でこそ女性の連帯が何よりも大事と、エールを送りあいました。

世界大会へのあいさつ

すべての人に安全な世界を

国連事務次長　中満（なかみつ）泉（いずみ）さん

かつて国連事務総長は、「私たちが一つの声で語ることは、道義的責任です。核兵器は容認できません」と述べました。私はその「容認できない」という言葉をあらためて繰り返したいと思います。「核兵器は正しい手にあるなら容認できる」ものではありません。「やむを得ない安全保障のために残念ながら容認すべき」ものでもありません。

これまで核戦争が起きなかったのは、運が良かったからです。しかし、幸運は戦略ではありません。ここ広島という世界初の原爆投下地に立ち、私たちは、核兵器がもたらした壊滅的な人道的被害をあらためて深く心に刻む必要があります。

被爆者のみなさまの働きと献身にあらためて感謝を申し上げます。核兵器のない世界の実現をめざす私たちにとって、これ以上の模範はありません。被爆者の方々の言葉は、これからも私たちを励まし、そして支えてくれるでしょう。すべての人にとってより安全で安心できる世界の実現に向けて、引き続き強く訴えていくことをここに誓います。

世界大会へのメッセージ

科学の力を平和のために

2015年ノーベル物理学賞受賞者

梶田隆章（かじたたかあき）さん

80年前、物理学の進展は人類にもたらすべき希望とは裏腹に、未曽有の破壊と苦痛を引き起こしました。この歴史は、物理学という科学そのものの罪というより、それをどのように用いるかという人間の選択にかかわる問題であると同時に、科学者の社会的責任の問題でもあります。

2024年7月、私を含む30名のノーベル物理学賞と化学賞受賞者が「核兵器に関する2024年マイナウ宣言」を発し、その後、104名のノーベル賞受賞者が宣言に署名しました。科学者は世界の人びとと指導者に警告します。すべての国が核兵器が二度と使用されないよう確約しなければなりません。それができなければ人類は存在しなくなるでしょう。

今こそ私たちは過去の過ちに正面から向きあい、科学の力を平和のためにそして人類の生存のために使う決意を新たにすべき時です。物理学に携わる者として、この大会に集うすべての方々と連帯し、ともにともに歩む決意を表明いたします。

月1回　女性　働く

法で守られない公務員 ⑤

―会計年度任用職員とは

非正規には年５日間のみの傷病休暇

野田　恵

私は関西のある市役所で働く会計年度任用職員です。

2022年に勤務中、市役所の健康相談室の保健師さんからすぐに相談室に来てほしいと電話がありました。「何事やろう」。7月29日に健康診断を受けて1週間後の8月5日でした。そこで保健師さんから「高度異形成」と書かれた検査結果を受け取り、すぐに産婦人科を受診するように言われました。

初めて聞く言葉「高度異形成」って何なん？　看護師の姉に聞き、近くの婦人科に姉についてきてもらい、検査した結果「子宮頸がん」であると、信じたくない現実を突きつけられました。

そこからは大きな病院に通院することになり、手術前の検査を何日か経て、9月13日から1週間入院し、子宮全摘出手術をしました。

病気になるなんて、しかもがんになるなんて、考えてもいなかった。子宮がん検診は2年に一回は受けていたのに、見つかった時には、がんになっていた2年に一回ではなく、毎年受診する必要があるのではないかと思いました。死を身近に感じたし、子どもの将来も見届けたいのに、まだまだ何も、全然やれていないと感じました。

退院後、自宅で療養していましたが、すぐに「そんなに休めない、いつから出勤しようか」と考えるようになりました。傷病休暇が年5日しかないからです。その後は残っている有給休暇を足して休むしかありません。給料やボーナスに影響する欠勤だけはどうしても避けたい。正規職員は、診断書があれば必要な期間は有給で休みを取得できるようになっています。

まだ、傷口がひきつるおなかを気にしながら、一カ月もたたないうちに出勤しました。ここでも正規職員との大きな格差を実感しました。

現在も定期的に通院し、検査を受けています。後悔しないようにやれることをやりたい。その気持ちは、病気が発覚する前より強くなった気がします。